

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別換領證第三五二號
昭和二十九年一月二十五日印刷
昭和二十九年三月一日發行

第二十卷
三月號

淨土



蓮文

三月號

浄土論義

西方に極樂浄土あり。いやない。いやなければ困る。困つても科學的にありつこない。といったような論義はもう何百遍も、何千遍もくりかえされて來ているが、尙いまだ終結に達せずに残こされた問題として、私共の頭上にぶら下がっている。

これは一體どおしたわけなのだろう。

本當にないものがあると信ぜしめるのがいいのか。ないものならはつきりないとして、改めてそのように教えの内容を変えて行くのがいいのか。——宗教とか信仰とかというものの、眞實の意義をさえ、はつきりと掴んでいれば、問題のないことなのだが。

本當には、あるのかも、ないのかも分らない。だが、あると信ずることが正しいのなら、あると信ぜしめればよい。科學的に信ぜられぬといつて、科學にこだわること自體、既に宗教の世界から墮落しているに外ならない。科學をもして信ぜしめるような、信ぜずにはいられぬような、強く逞しい信仰こそ、生きた眞實の宗教ではあるまいか。

現代人は、現實的には信じ得ないが、信じたい氣持ちは極めて強く持つてゐる。このことは歐米の信仰調査にもはつきりと、數字的に出てゐる。大衆は浄土を信じたがつてゐる。その大衆の信仰欲求を満足せしめ得ない理由は、教義學の非近代性に外ならない。

何も戸迷ふことはない。教義學の全體を貫くバックボーンさえ、しつかりと持つていれば、教義の表現をどんどん改新して、超近代的な装いを誇ることも出来る。だが肝腎のバックボーンが抜けてしまつてはねー。ではその背骨とは。いうまでもなく、

「自ら信じて、人をして信ぜしめる」

(竹中)

浄土三月號目次

佛の道は寂しくも強し……………吉田絃二郎(1)

吐から……………中野尅子(4)

死について……………竹中信常(10)

筑紫路に善導寺を尋ねて……………大橋俊雄(16)

音樂法要……………谷口・片岡・伏見・石川(19)

おひがん……………眞野孝信(8)

靜なき彼岸……………澁谷賢應(12)

趣味……………いけ花の制作と觀賞……………(觀賞) 上田純明(22)
(制作) 上田理和

指つかい人形の製作法……………森正義(15)

生きる……………齋藤昭俊(7)

サロンの宗教……………安居香山(26)

一掃除二勤行……………眞野龍海(25)

小消息講義……………佐藤賢順(28)

芝園だより……………表(三)

表紙……………松濤達文

佛の道は寂しくも強し



米田 經二 所

善光寺の如來さまが京の眞如堂に出開帳なされた時、去來はさつそく拜みに行つて

ひいやりと野山にみつる念佛哉

といふ句を作つて芭蕉に見せた。すると芭蕉は「斯る句は全體おとなしく仕立てるものなり。五文字然るべからず」といひ、ひいやりとを風薫ると改めさしたが、後にさらに

涼しさの野山にみつる念佛哉

と改めさせた。

何でもないことのやうであるが神佛に對する芭蕉の虔虚な心づかいがしのばれる。

芭蕉の生活を見ると枯淡をきはめたもので、禪僧のそれであつた。

たとへば深川芭蕉庵の生活状態といへば、へつついが二つ、瓢がたゞ一つ厠の柱にかけてあつた。二舛四合ほどの米がはいりさうな瓢で、空になれば弟子たちが米をはこん

できて瓢に入れた。もし弟子たちが持つてこない時は、芭蕉はてくてくと歩いて自分で米を買いに行つた。芭蕉はそころ四十二三であつたがひどく老けて六十くらゐに見えたと記されてゐる。氣むづかしいところがあつて、其角嵐雪のやうな高弟たちにも究屈がられてゐた。いつも茶の紬の八徳を着ていたといふことである。

芭蕉庵には佛壇があつた。壁を丸く、くりぬいて砂利を布き、出山の釋迦が安置されてあつた。芭蕉は文字通りに嚴肅な佛弟子であつた。

この閑古な佛弟子の生活は近江の國分山の幻住庵のそれでもうかがはれる。

石山寺を下つたところから、道を左りに曲つて藥師堂の前の小徑をたどり十丁ばかり歩いて行つたところに國分山がある。

琵琶湖を一眸の裡に見わたす絶景の地である。

幻住庵はこの山の上にあつたものだが、今は一本の椎の木だけを残してゐるに過ぎないが、幻住庵の裏の清水は昔

のままに靜かにとくとくの雪を湛へてゐる。芭蕉の幻住庵の記には「とくとくの雪をわびては一爐のそなへいと輕し、前に住ける人もさすがに心高く、たくみおける物數奇もなし、持佛一問をへだて、夜のものかくらふべき所などいさゝかしつらへり。……山居といひ、旅寢といひ、させる器たくはふべきにもあらず、木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり枕の上の柱にかけたり」とあるのを見ればその簡素な生活振りが察せられる。

幻住庵の隣りにお宮があり、その宮寺の翁や山の下の人など訪ねてきて、猪が稻を食い荒したことや、兎が豆畑に出てきたことなどを聞かしてくれたが、芭蕉は里の童たちに頼んで、山の裾を流れている小川から小石を拾ひ集めては經文を寫してゐた。

一面から見ればかれは出家の境涯にあつた。かれ自身その心境を語り「病身や、人にうらみて世をいとひし人に似たり」と言つてゐる。しかもそれならば世捨て人らしく法をも修むべきであるに「法をも修めず」といひ、自分を責

めてゐる。

實際芭蕉も若いころは人並みに世間的な立身出世の望みもいだいてゐた。「或時は仕官懸命の地をうらやみ」といつてゐる。

同時に「一たびは佛籬祖室の扉に入らんとせし」とも言つてゐる。さればこそ佛頂禪師の鉗槌を受けたのである。

この禪的、佛教的修行がなかつたとしたら芭蕉の俳諧の幽玄さといふものは、あの深さまで掘り下げることとはできなかつたであらう。

今年の冬はめずらしく大雪が降り、寒さも一しほきびしかつたので、眞夜中に眼がさめ、眼がさめるとともにからだの方々が痛みはじめ、夜の明けるのが待ち遠しかつた。

三時が打ち、四時が打つ、空はなかなか白んでは來ない。痛みをこらえて心經を誦し、からだ中の硬ばつた力を柔かに落してしまふやうにつとめた。これが毎夜のことである。かつては夜の來ることがわたくしにとつての救いであつたが、今は夜の來ることが恐ろしいこととなつた。

しかしわたくしは病苦を忍ぶことによつて、同じやうに眞夜中に痛みになやみつつあるであらう未知の人たちのことを思ふやうになつた。

また人間の生きようとする意欲のいかに根強く執拗なものであるかを知つた。病は日一日とじりじりとつにつてゆくことを感じながらも奇蹟を信する心が胸中に湧いてゐる。宮本武藏は神佛を敬して神佛に頼らずと言つたが、凡夫の身には神佛を敬して神佛に頼るといふ一念の心が片隅に去來してゐるといふのが偽らないところである。それかといつて死を恐れるわけではない。死は病苦から、さまざまの人間苦からわたしたちを救つてくれることを思へば死も亦ありがたい。

ともかくもあなたまかせの年の暮

とうたつた一茶のころもちはすべての凡夫の生死觀と通ふところがあらう。

武藏野も深い雪に掩はれてゐたが、いつのまにかどこからともなく幽かな丁子の香がたゞようて來るやうになつた。



肚 か ら

中 野 尅 子

A 我々商賣人で一番苦になることは、所謂「正直者は損をスル」と云うことで、肚でやつて悪いと思つて居る事もやらんならぬ時があります。それが苦しいです。

O 正直者は損をスル——と思つて居る程度の正直だから損をスル。本當の正直者になつて御覽なさい、損をせやせぬ。正直をやつても損をするすると思つてゐるから、厭や厭や正直をやつてゐる。だから損をスルそんな者は本當の正直者ではない。不正直です。だから損をするのです。不正直なら不正直で、堂々と是れ位の不正直はやつてもいい、やらんならぬ、やる時だ！ と確信を以てやつたら不正直でない。正直の應用です、正直の變形です。

A 其の變形が多いので、どうも氣持が悪いのです。

O いや、變形ばかりでせう。ハハ……。それぢや型も崩れて、千に一つも原型も無いから損をする筈ですよ。應用だから千に一度はいゝが。九百九十九通まで應用では大赦令が多すぎる。それぢや税務署だつて、お客さんだつて見通しませんよ。

A いや早や、飛んだ處で曝露されて了ひました。

O いや、自分で尻尾を出したのです。不正直者も正直者も自分から曝露して居る。そう云うとあなたばかりを罪人扱ひにして居るようだが、皆、鵠的存在です。ヌエと云うのは、頭は猿で、胴は狸で、手足は虎で、尾は蛇のようだと云うが、斯う云う不統一の聯合軍では強いようで弱い、支離滅裂です、信仰から來た應用は、時には猿のようにもなり、虎のようにもなり、蛇のようにもなるが、一身の轉化であつて、團十郎が辨慶さんにも、九郎判官にも、富樫にもなるようなものです。すつかり化け切つて、此の時には此の役をやらんならぬと「役者」になれば、不正直も一役で、其役が生きるのです。自分が生きるから相手も生きる。相手を活かすが爲めにもココ一番は大正直者もせんならぬと乗出すような大嘘をつくようになります。なつたら肚藝で、此の大芝居なら「ウソも方便」と云う大眞實です。あなたが肚ではやつて悪いと思つて居る事も、時にはやらんならぬと云われるような不徹底さではいかぬ。「肚から」やるのですよ。肚

から。眞實もやるが、不正直もやる。形は違つて居るが、どちらも大眞實より發して居る。子供にはお藥に砂糖を入れて飲ませたり、呑め！と叱つて見せたりする。心ある親の仕打ちは、どんなに酷に見えても、皆愛です。釋尊のような悟達の人を佛教では「應化身」「方便法身」とも云います。自由自在に應用變化極まりなき妙用を現する體現位の人です。

實は花の一輪、鳥の一羽も此の應化身で、生れながらにして我々は眞善美の表現、現象だから實體を離れぬ。實體を離れぬ千姿萬態です。だから私もあなたも實は如來が化けて、私やあなたをやつて居られるのだから、此の「如來心」でいつも「味のある商賣」をやつて頂き度い。然しそれが爲めには、いつもお念佛をして自分の調子を加減調律して居らぬと、飛んだ暴音になつたり、暴走になる。理屈だけではいかぬ實際の六づかしさと、又妙用がありますからお互に強く反省し、臆病になつてもいかぬが、又生意氣になつてもいかぬ。自惚れて、久米の仙人が雲から下り落ちるようになってもいかぬ。信仰は明るく、大きく、ハッキリして大膽に、カラカラと笑つて悠々と天地を踏み破つて行けることです。

(5)
▲ いや、『味のある商賣』と被仰るのには全く敬服しました。私も略ぼその邊に見當はつけて居りましたが實にハッキリしました。吾々同業者間にも、實に金で面を張るような、常に金を握ることに、は凄腕のある男もありますが、いくら何でも、あんなにまでして

儲けることは私の商人魂が許しませぬ。大儲けもようしませぬが、顔の發たるような事はしたくない。

○ ソレですよ。ソレが本當の「儲けもの」です。ソレを儲けた上でお金も儲けなくてはいかぬ。いやソノ信用——誠を儲けたら必ずお金も儲かります。其の肝心なものが儲かるまで辛棒せずにお金が握りたいと思うものだから、一時、時勢の波などで金を握つてもスグ離らかして藻屑の底に沈淪する。戦後派の人が多く沈落したのはそれです。商賣も軌道の上に乗つて進みかけたら、もう沈む事はない。

▲ 商賣の軌道とは何ですか。

○ 第一研究、知的要素で、商賣のルート、商品に關する知識、經營法、商店や工場の構成組織に付いての絶えざる研究と改善、向上と進歩です。言ひ換へると内容實力の充實です。全く根本的に商賣の素質が良くならねばいかぬ。内容の悪い者は、どんなにお稲荷様を信心してゐても、お不動様をお祭りしても、信心だけで發展や繁榮するものでありませぬ。

第二には情的要素。温き愛情、親切、お客様へ對するサービスです。第一のガツチリした實力と共に、此の第二のやさしい麗しさ、やさしさ、純情さです。前を男性美としたら、是れは女性美で、商賣にも丸味が無ければいかぬ。物固いだけ、几帳面なだけではいかぬ。柔か味、融通味、人情味、同情氣、勇氣がなければいかぬ。そ

れでないとい、團結が出来ず、チームワークが出来上らぬ。外、人に「好かれる「魅力」が具らず、弾力性がなくなります。よき番頭さんの助けとか、奥さん等女性群の協力が大切で、自分の手にも、此の痒いところへ手の届くような親切が、偉大なる發展の爲めの資力になります。

第三には、意的要素で自信を持つことです。ヨソが何をやろうと他人がどうやつて来ようと自分は自分で、自分の特色を益々發揮して、他へ捲き込まれぬ。例へば他が競走の品を造つたり、競走をして、他へ来ても絶対に自分は自分の方針を押し進む。勿論、相手の商品や遣り口は十分研究し乍ら、自分の商賣をも十分研究し、決して劣らぬように努力し乍ら理想型を持して進む。此の強き信念は第一の研究と、第二の愛を持つて居らねば出来ませぬ。小型と雖も決して他から切り崩されぬだけの底力、業界がどんなに不振の折にでも、自分だけは繁榮する位いの實力が得たい。それは小さくは吾れ、廣くは業界全般、世界的動きにも炯眼が及んで居らぬと出来ぬ事です。

又、これを横に見ると、

一、金で商賣をやる人と

二、腕で商賣をやる人と

三、信で商賣をやる人と三つになります。

第一は、金の力、資本金で押して行く人。これは親の遺産や、會社

が資本金にものを言はして壓倒するやり口です。第二は腕にものを言はして縦横にラッ腕を奮う人。第三には眞面目で篤實、コツコツ親切を籠めて實意丁寧で、十年一日の如く、昔も今も變らぬ信義一徹で通す。此の人は徳を積んで、晩年ほど名聲騰り、財も人も意の如く使へるようになる人です。青年時代は金が欲しい。壯年時代は腕が欲しい、そして晩年に至つて、初めて信がものを言い、徳が仕事をやるものだと言ふことを泌々悟る。

此の三つを初めから持つて進む人は、どんなに苦境に落ちても、あせる事も無く、奸策を弄する事もなく、悠々として而かも寸分の油斷なくいつも努力と研究とによつて挽回したり發展する人です。信念が第一です。信仰が第一です。先づ自分が信仰で出来上り、家中や商店や、會社の中が信仰の氣運で統一するようになったら、もうシメたもので、根の附いた草木のように勃々芽が伸び、葉が出て花が咲き、實を結んで行く、實に確實なもので間違ひがありません。いらぬ講釋のようになりましたが、身を以てコレを體驗して見て下さいませ。

基本は斯くの如きものであると思います。そしてコレが商賣上の成功法などと云うよりも「宗教」そのモノなんです。宗教とは地上に於て、今、自分が宇宙の大法に順つて生活實踐すべきものであつたのです。

吾々は断片の中に住む、ある限られた地方に、限られた範圍に住むのが多い。しかし自然は一定の秩序を教へ、反覆をいとわず倦怠を來たさず營々としてうまず、いつも寛容で性急にすぎない。激し、性急にすぎるのは吾々であり、小自然である。都會に

生 き る

俊 昭 藤 齋

住むものは個々の接觸はだん／＼に失われ、ある定まつた集團によつてのみ接觸を保ち得る。たえず見知らぬ人に會う機會をもちそれが多くの刺戟となる。吾々は段々と自然は二

の次にして生きて行かなければならなくされてしまった。のんびりしては居られなくなつた。昂奮と喧噪と醜惡の中にが／＼と生きて行かねばならない。しかし、生きることには相違がない筈だ。自然に則する生活も、社會に即する生

活もともに人間が生きることによりはなれない。人間自身が悩み、苦しむことには變りはない。悩み苦しむその過程が大切なのだ。

社會に生きるためには昂奮と喧噪と醜惡の中にあるから、いやなことに何時も出會う。それを正しく生きることが佛教である。

佛教は「正命の佛教」だと椎尾博士は云つて居られる。

生きることとはつらい、分つたようで分らない。佛教も同じことだ。そして常に生きんことを欲する。佛教も同じだ。だが強く生きたい。風にもめげず、雨にも負けずに生きたいのが本當だ。ヘンリー・ワーズワース・ロングヘローの詩に

雨の日は寒く暗く物寂しい

雨が降る、風はやまない

落ちそうな壁に蔓はしがみつく

風のたびに枯葉は落ちる

雨の日は暗く物寂しい

人生は寒く暗く物寂しい

雨が降る、風はやまない

思想は崩れかゝつた過去にしがみつく

若者の希望は風に倒される

雨の日は暗く物寂しい

靜かに、さびしい心よ、なげくまい、

雲の裏には太陽が輝いている

運命はそれ／＼違ふもの

誰れにも雨はある

暗い物寂しい日をへねばならぬ

と、この譯は詩になつてゐるかどうかわらない。この英詩原文は非常にいゝ。

生きるには雨も風もあるだらう。つらい

悲しいこともあるだらう。だけどそれは希望につながる、嬉しさにつながる。

正道を歩むときかように感ずる。

生きんとするときさう思う。

所詮は個々の心理かも知れない。



おひがん

眞野孝信

京都では比良や愛宕の雪が解け初めて、老婆や子等が嫁菜や艾や土筆摘みに川堤を散策する頃になると春の彼岸がやつて来る。

饒石であつたか「本堂で下駄ぬすまれし彼岸かな」と憂世の矛盾を吐くかげにも、何となく憧れと親しさのあるのが彼岸である。いや、現實の矛盾につきあたればこそ、彼岸への憧れがあるのではないか。季にめぐまれ、場所を得た心の安らかさをしみじみ感じとれるのは、彼岸會の座であらう。「うとくと彼岸の法話ありがたや」の句などが見えるのも不思議ではない。これこそ正しくお互ひの素直な姿ではなからうか。

高祖善導大師が觀經疏に喩へられた「二河白道」の説話は、生死出離の佛縁にめぐまれて此岸をはなれ、攝取の願力に浴して涅槃の岸に到達する信行人の姿であり、淨土教徒の本懐である。現實より理想へと進む不退の道ゆきは、至極險阻である。然し流轉の盲生も

決して樂ではない。靜かに佛や先德の導きを仰いで信行する素直さこそ、最も安らかな姿であり、彼岸への直路である。

聖德太子が四天王寺建立の願文に「魂を彼岸に游べ意を道場に銷く」と。無難禪師は、「すてゝみよ浮世の外の思ひ出に、しかも浮世にすみぞめの袖」と詠じたが、彼此不二を一にして而も二と説くところに現實性があり理想境を確観しながら彼此の連續して而も離れ得ぬことを示唆するものである。極樂は、

「西方十萬億土を過ぎた世界である」として説かれるかと思へば、又「こゝを去ること遠からず」と説かれている。厭穢の情切なるときは淨境のより遠きを欲し、欣淨の願望強きときは遠近をとはずして自ら眞近きものとならざるを得ない。蓮華台上に在す如來の御影も、濁世に在つて淨身を保つ事の出来る世界を表し給ふを思ふとき、一入有難さ身にしみて信仰の情自ら深まるのを覺える。妙華の泥

中に開花する如く、如來は濁世に降臨して説法し給ふのである。佛光・法益・僧縁遍滿して、汚濁の此世は理想化し、涅槃の彼岸は人間の安住する現界の淨境となる。彼岸—淨土を此岸—穢土と相對する別天地と考へるのは佛教をこの世離れのした教、或は天樂と聞き流して、日々の生活を輪迴苦樂の一劇と見て空過し、いたづらに空想を描いて彼此の大きなかけはなれに落膽し、疲弊と歎息に終始する結果となる。

「うれしくも人と生れてみ佛の、さとり之道もこれよりぞ入る」と行誡上人が詠まれたように、生れ難き人界に生を得て、祖孫一貫の生命を體現する身の尊さを感じるは佛法のお陰であり、發し難き道心をおこし、離れ難き輪迴の里を離れて、生れ難き淨土に往生する前提は、此土人界に於ける信行不退の精進でなければならぬ。

元祖上人和語燈錄に「念佛申すには、また

く別の機なし、たゞ申せば極樂へ生ると知りて心をいたして申せばまいるなり」と。念佛申して打つ鉢鉦（ふせがね）は妙蓮華であり「南無阿彌陀佛」の一聲々と共に、一打々々の勤行相は、彼岸淨境への歩みであり、蓮華台上に登る姿でなければならぬ。ここに身心一切を打ち込んだ稱名三昧の聖相があり、厭穢欣淨到彼の眞相がある。「ただ申せば榮樂へ生ると知りて心をいたして申せばまいるなり」——安心と起行、信行——この外に彼岸への直路のある筈はない。「西へゆく道じる人は阿彌陀佛と、となふる聲に身をぞまかする」と詠まれているが、報土往生の要諦はこゝに在る。

は、波羅密はらみつを行じて苦海くかいを度わたらうとする菩薩
行と、共に、愍あはれぶだに床ゆかしいことである。日
想觀を行じて、釋尊の韋提希に説示された觀
法の實踐であり、今この時こそ、善導大師の
御指南に直參し、和國の教主の發願にあやか
ることの出来るを覺え、毎歳めぐり來る
春秋二季の彼岸こそ、待望の訪れとして迎へ
ることが出来るのではないか。男山に連る自
坊の山頂や、淀川堤の河原に下りて、こゝ數
年來つゞけて來た私にとつては、この日想觀
こそ、齡を重ねるにつけて缺くことの出来ぬ
床しい行事となつて居る。

古徳の「西へ行く道より外に今の世に、浮世を出る門やなからん」と、彼岸への思慕懷は、佛徒の通念であり、一切の人々の共願でなければならぬ。

寺に詣で、香華を獻じ、祖先の靈に追孝の誠心をさしげ、三界の萬靈、無縁の靈に回向し、合掌する信行相は自他隔通し過現未を一貫する全一の行相であり、小さな我を没却した阿彌陀佛直參の相である。口に「南無阿彌陀佛」と稱へ、合掌敬禮する相は、佛凡相即の最も聖なる凡夫本然の相でなければならぬ。純粹な絶對歸依には彼我の區別もなく、

彼此の隔りもない。勿體なくも有難き説法の
深妙を佛陀に感謝しつゝ、無知なる私共に無
音の聲をはりあげて導き給ふ像類、さては季
の移りに従つて訪れる佛教行事の一々の創始
者にも深厚の謝意を表する次第である。

「み佛の中とも知らで眠り子は、生死の夢にうなされにけり」

「呼びませるみ聲はあれど聞えぬは、迷の
眠りにふかければなり」
(弁榮上人)

一切の理屈をぬきにして、せつせと働く人々の上に、大いなるみ親の慈光はかゞやいて居る。「まけよまけ、菩提の種も彼岸から」と言はれて居るが、佛道精進の勇氣を覚え、佛作佛行に無上の法悦を感じつゝ、萬象を生かし育て給ふ大いなるお力を拜む時、淨穢も苦樂も攝取の願力の陰には、迷へる小さな私の斷見となつて、淡雪の陽光に消える如く影を没してゆく。彼岸へ！ 彼岸へ！ 有難きお導きを重ねて感謝する次第である。

(洛南の古刹裡にて)



死について

竹 中 信 常

「近頃、私は死といふものをそんなに恐しく思はなくなつた。年齢のせるであらう。以前はあんなに死の恐怖について考へ、また書いた私ではあるが。

思ひがけなくも来る通信に黒杵のものが次第次第に多くなる年齢に私も達したのである。この数年の間に私は一度ならず近親の死に會つた。そして私はどんなに苦しんでゐる病人にも死の瞬間には平和の來ることを目撃した。墓に詣でても、昔のやうに陰惨な氣持になることがなくなり、墓場をフリードホーフ（平和の庭）と呼ぶことが感覺的な實感をびつたり言ひ表はしてゐることを思ふやうになつた。……

愛する者、親しい者の死ぬることが多くなるに従つて、死の恐怖は反對に薄らいでゆくやうに思はれる。生れて來る者よりも死んでいつた者に一層近く自分を感じるといふことは年齢の影響に依るであらう。……」

三木清の「人生論ノート」冒頭の一節である（假名づかい原文のまま）進歩的哲學者として、かつては危險思想の持主として、冷遇

され、悲慘の中に自らの死を見究めて逝つた此哲學者には、その後のぼのとした同情と親近とが寄せられたのであるが、私もまた、學生時代に親しんだその著書を、改めて、同年齡的な立場に至つて讀みかえしてみても、矢張りそこに流れるヒューマニズムに限りない共鳴を感じざるを得ないのである。

生命が死に裏付けられてゐること、ひとは生きつつ、死ぬものであること、そのようなことを今更、頭の中で繰返えして考へてみたところで始まらない。私がいいたいことは、三木清が「感覺的」に死を感じたやうに、私もまたそれを、現實に、自分に引きつけて感じるやうになつたということである。それが年齢のせい、或は近來起つた内心のもつれのせい、か。今の場合はいふべきではない。

私は先日伊豆に遊んだ。三島に眠る舊友の墓を兼ねて、箱根山脈と天城山系の間に横わる丘陵の西のはづれにある、淋しくひそやかないでゆの町に四五日滞在した。ひとり切りの明け暮れであつた。「壁に向つて語る」といつた實感を泌々味合ふことが出來た。ひとは黙つていられない悲しい運命を持つものであることも知つた。

私は紙に想いを綴つた。川邊に出て、枯草に伏して山に向つて話しかけてもみた。ひとから遠ざかれれば遠ざかる程、ひとが間近に感ぜられる。人間は決して一人でいることの出来ないものと悟つた。

ところが、「死」は孤獨である。獨來獨去である。死の恐怖は「一人」になることにほかならない。ひとり切りの無限の淋しさに入ることである。私は、一人切りの宿にいて、一人切りの天地を感じ、人を身近に感ずると共に、その現實の孤獨に——死を連想した。

私は決して、たまたま感じた私の感傷を訴えようとしていたのではない。「死」というものが、考えられた場合の「死」と、感じられた場合の「死」とは、その相貌を異にするものであることをいいたいのである。年齢的にか、情況的にか、死を感じた私は、どうやら冒頭に引用した三木清の文章に、偽りのない自分の感じを讀みとつたのである。

近來「生きるため」の宗教ということが——特に佛教のために、盛んにいわれている。私自身もかつて本誌の巻頭言に「正岡子規の死生觀」を掲げて、悟りということが「平氣で生きること」であるといった意味のことを書いたことがある。その意味では、宗教は「死人」のためのものではない。いや、いかなる意味でも「死人のため」の宗教などは存在すべきではない。釋尊もまた「死の状態」については黙して語られなかつた。正しく、佛教は「生きるため」の宗教でなければならぬ。

ただ、問題は「生きる」という「生き方」のいかんにある。生きるということを一方向的に取つて、「生命」とのみ解すれば、近來流行の新宗教の亜流に墮してしまふ。佛教の「生きる」は倦くまでも「死」との相即に於いてでなければならぬ。たまたま繙とく佛教聖

典の大部分の章節を満たすものは「生命」のはかなさ、もろさ、弱さについての教説である。そのような、はかなさ、もろさ、弱さは詮ずれば「生命」——死に對立する有限なる生命が持つ本質的なものにすぎない。死に即した、死に裏づけられた「生」は、死と對立するものではなく、それを乗り越えて行くものである。釋尊の涅槃は「死」をではなしに、逆に「生」を眞實に示したものだといわなければならない。釋尊は「死」を頭で考えることを避けられた。然し現實の生きる生き方に於いて不斷に死を感じられていたのである。釋尊の死は考えられた死ではなく、感じられた死であつたのである。釋尊にとつて、「生きる」ということは「生命」から離れることといわば「生の執着」からの解脱に外ならなかつたわけである。その意味で、私は釋尊ほど眞實に「死」の問題に取り組みされたものはないと信ずるのである。

眞實にいうならば、佛教は「死の宗教」なのである。「死」を抜きにして、佛教を、いや宗教を考えることは出来ない。死——それが眞實の意味の死である限り、宗教はここを出発点としなければならぬ。いうならば、信仰ということもまた、これを基點としてのみ存立し得るものであると思う。本誌二月號にいみぢくも、森本師夫妻の臨終講式執行が報ぜられたが、これこそ正しい眞實の信仰への發足であり、誠實なる佛教の實踐といわなければならぬ。

徒らなる「生の宗教」——治病・免災・長壽・安福のみに終始する似非宗教の跳踊する昨今、上べの時流におもねつて、「死」の根底を逸脱する傾向が、近來時として佛教の中に顯われて來ることは、悲しいことである。

岸 彼 き な 諍 あらそひ



應 賢 谷 澁

あたゝかい正月、寒い二月、そんな氣節を通りこして今年も春の彼岸がやつて來た。去年をくりかえすまいとして全國の農民たちはその日その日の温暖に神經をとがらせて、異常の眞剣さをしめしている。新聞、ラジオの長期豫報には耳をすませ、幾多開かれる農業講座には満員の盛況である。

そうした熱心さと關係なく、時は刻々に春に近づき、自然はそのよそほいをはじめているのである。實に緊迫した、自然と人間との對決であり、そこには不純な、不眞面目な、何ものをも認める餘地がない。

ところが、一方人間界の中を見るとき、國會は例によつて例の如くみにくい黨の争をくりかえし、政略、謀略のかぎりをつくして我が黨に利あれと願ひ、我黨の曲は直にして、他黨の直は曲である方向をたどつて、多數にものを言わせて不合理を合理化そうとし、そのことが政治だと心得ている人々が、手盛りよろしく數多の法律をつくり上げている。物價は上る。生産費は高くなる。凶作にあえぐ人々をしり目に、黨の内外の「争いのための争い」は益々暮しにくい生活をつくりつゝ、

又そのことを因として、争いのみぞを深くしている。「政治とは争うことゝ見つけたり」と言いかねない見幕である。

一體日本人は他人の惡口を言うのが好きである。井戸ばた會議、こたつ談議より、はじめて議會にいたるまで、人が集まれば必ずこのことがなされる。すべてのことがらには評論家があり、政治、スポーツ、藝術、映畫、それらの中で、彼等はその惡口を言うをもつて渡世の具にし、又、それでもつて渡世せしめている日本ではある。「日本ほど評論家の多い國も少ない」と言うことを聞くがもつともである。

他人の惡口を言うと言うことは、何も今の日本に限つたことではない。經文にはいたるところにこのことををさとされている。

「おろかな蘭はふさぎて心開かず、

菩薩・法師・衆生の恩をば念はず

反つて害心を生じてそれに逆ひ、

あまつさえこれの危滅をたくらむ

貪り妬き、ねたみをいだいて人を見るは

ひと時の満足をその人にもたらず、

しかれども、

放心自ら大にして大難を顧みざること
これを甚だ憐み傷むことゝなす」

(賢劫經第一、行品)

政黨政派の争に對して、「おろかな闇はふさぎて心開かず」と言い、「衆生の恩を念はず」と言へば、いかにも觀念的な、抽象的な、例によつて例の如き宗教家の迫力なき、芝居けた説教と思うものもあるかもしれぬ。けれども、政治の内がわに入り込み、その世界の人となればなる程、このことはひし／＼と身にせまることなのである。

こゝろみに政黨分派の争を見ると、議會に於て討議されるその内容を聞くとき、「貪り妬き、ねたみをいだいて人を見るは、ひとときの満足をその人にもたらしめているかの如く、又、分派政治家の末路を思うとき、「放心自ら大にして大難を顧みざること、これを甚だ憐み傷むこととなす」とは、たゞ單に合流者の辯のみでなく、又、一般國民の感情でもある。

政界だ、議會だ、なんののかんと偉そうなことを言つても、結局人間のなしている人間社會のことであり、その限りにおいて、人間

を離れぬことは當然で、不思議でも何もないことなのである。

議會政治の範として、議會政治の創始者イ

ギリスが擧げられている。そこでは反對黨の議員が他黨を攻撃するに際し、「我が尊敬する反對黨の諸君」と必ず一應の敬意をはらうことを以てエチケットとしているのである。これはたんなる挨拶であるかも知れないが、よしそれが挨拶にとゞまるものにせよ、一瞬の和かさをもたらすことは又必然と思はれる。或る時にはいきり立つようなことがあり得ても、このエチケットを守ることによつて方向の規制が出来得るとも考えられる。さればこそ、黨を越えた意見の團結が見られ、或る時は黨是を外にして見界の上にも立ち得る可能性が生れる。

日本の政治家は言う、「何と言つても諸君の意見が基本ですからね」そこで我々は署名運動にのり出す。たくさん署名をもつて陳情に行く、「お話はよくわかりました。努力しましょう」。議會が開かれるとそんなことは眼中になく又「争いのための争」をくりかえす。陳情團がそれをせめれば「やはり黨是は黨是

ですからね」とくる。

「供養の利を以ての故に

名を求めて誹謗を行す

大衆の前にあつて禮することあつく

歎じて言う『甚だ善い哉』

其と別れ去つて後

便ちその惡を説き

愁いうれいて目に涙し

自ら歸して其の身を念ず

おのれは其の勝れたるを求め

自ら勳^二勳^一を歡じてかぎりなし

尊きを知つては嫉^二嫉^一を懷い

他の供養を得るをまた妬^二妬^一む」

(賢劫經卷一、法師品)

佛の教説は全く鋭い、あらゆる政治家に對する批判のうち、これ程に鋭いものを私は知らない。

もつともこのことは、一に政治家に限つたことではない。あらゆるものにとつて言い得ることであり、職のいかんを問はない。

「ほめたゝえること」それはほんとうにむづかしい。ほめる技術がむづかしいのではなく、ほめる氣持になるのがむづかしいのであ

る。「讚嘆供養」と言うのはこのことを言うものなのであらう。

私は東京の海苔屋さんで次の話を聞いたことがある。

或る海苔屋の間屋さんがお得意先を求めて大きな小賣店に行つた。その海苔屋さんは自分の海苔を賣ろうと思つて一生懸命であつた。一通り自分の海苔のよい効能をならべて後、彼は主人に言つた。

「どうです、これが私の店の特長なんですよ」

主人はだまつて聞いていたがそのうちに奥から二つゝみの海苔をもつて來た。

「これはどうです、おたくの見たところ」

海苔屋はそれを見つめていたが、

「これはなつていません、一目でわかりますよ、色も香も、とうてい私のものなんぞと批較になりません」

主人はすかさず言つた。

「そうですか、でもこれはお宅の小僧さんのおいて行かれたものなんですよ」

これには二の句がつけず、海苔屋さんはあわてゝ逃げかえつたと言うのである。

ちよつと説話じみているが、これが實話であることも事實であるのだ。

こう言つたことがやはり我々の世界のどこにも行なわれているのではないか。このことは政治に對しても、社會に對しても等しく言ひ得ることではないか。

各々何かを賣りものにして生きているおたがいである。賣れなければその身がもたない。しかしだ。こゝに反省しなければならぬ大切なことがある。

「供養の利を以ての故に、名を求めて誹謗を行す」ることなき氣持、このことが大切中の大切である。

經には次の如く言われている。

「樹木の風おこつてたがいに相すり

忽然として火を生じてかえつて自ら焼き毒蛇は毒をますこと日に多ければ還つて自らの身を害し

鐵の自らさびて其の形を葬るが如し」

ほんとうにその通りである。

(賢劫經第一行品)

「彼岸」とは争のない世界である。ねたみのない世界である。

「十方に妙行をよくたもち

諍を棄てゝ以てたがいに樂しめ

心にはわだかまりの垢塵あり

嫉心をいだいて亂を欲す

しかれども

人中の上は眞を喜び

言辭甚だ流利なり

この法目を總持して

自ら立つて十方を建たしめ

曉り了つて解脱し

樂を勸めて彼岸に度す」

(賢劫經第一行品)

新刊 梶原單堂著 佛陀への道

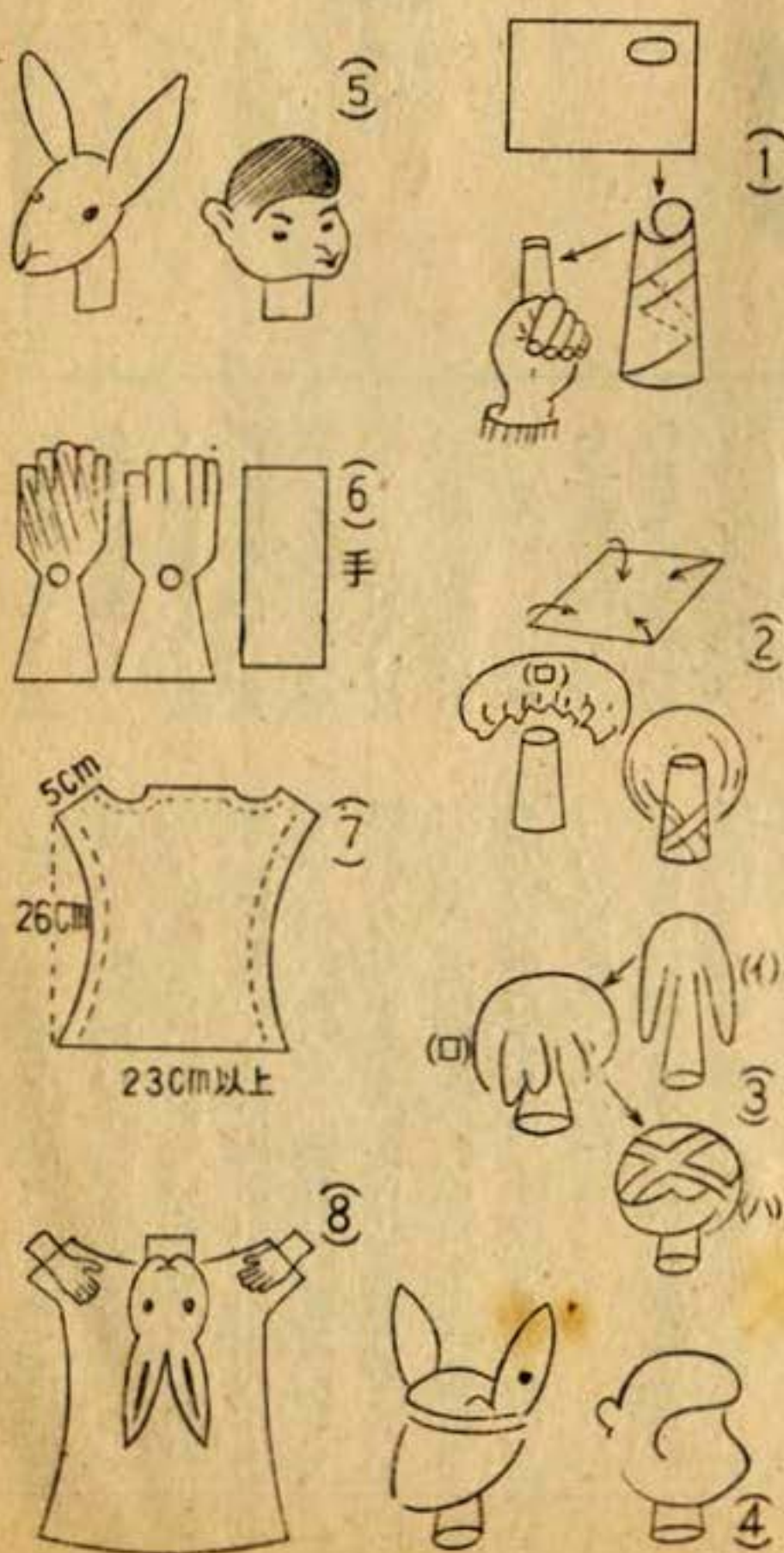
現代人の佛教入門書というサブタイトルの示すように、わかりやすい佛教の紹介がなされてゐる。人世と苦、智慧の眼、信か悟りか、人如何に生くべき等々の問題につき難かしい佛教獨特の用語をさけて平易に説く。著者は京都大學哲學科出身、光明苑主。(定價 百圓、四六版百拾頁、東京都文京區高田豐川町三七七出版株式會社發行)

かわい、子供達に、みなさんは、ギニョールを、演つて観せたく思われませんか。人形が動く。と云うだけで、どんなに、子供達はよろこぶ事でしょう。もつとも、やさしいギニョールの作り方を、これから書いて見ましょう。人形の頭は、陶器・石膏・彫刻・木屑・綿製・紙製等・作り方は、いろいろ有りますが、古新聞を煮て紙ねん土をこしらえてかためる方法か古新聞のテープを貼りかためて作る二つの方法が一番軽くて、細工も楽です。この方法を述べる事にしましょう。手は、衣装に固着さす手と、筒をこしらえて自由にとり外しの出来る手と二つの方法があります。衣装は、三〇cm平方の布二枚を、ご用意下さい。先づ顔の作り方ですが、①古はがき二枚をはり合わせたものを横にまいて人さし指の入るふとさのつゝを作り糸でぬいとめます。②古新聞を八つ切りにしてその中の一枚を、ま四角にして、のりをつけ、つゝにかぶせます。③外の古新聞をよくもんで一枚づゝ首のところだけ残すようにして上から、かぶせます。(大體四・五枚)首の方からもかぶせまるめて、細長く切つた日本紙に、のりをつけて何枚も、はりつけます。④古新聞か、古新聞紙を、こまかくちぎつて、ドロドロに煮て、ふのりを煮てねつた、紙ねん土で、鼻と耳をつくり、脚本の登場人物、或は動物の顔かたちをこしらえ上げます。顔ぜん

たいを、白い日本紙で、はりかためます。⑤かん／＼に、かわいたら、ごふんを塗つて、その上を好みの色をぬります。材料はポスターカラーが良いでしょう。ギニョールは、なるべく、こちようした、おどけた顔が効果的です。口はものを言つてゐるような、半開きが良いでしょう。眼は大きい程、舞臺で効果を出します。要するに、いつも舞臺効果を考へながら製作することです。⑥手は、幅二cm長さ七cmの板を二枚つくり、真中に穴を開けて置きます。穴の両わきを切りこみ、手先をまるめます。出来上つたら人形の種類にしたがつて、色をぬります。⑦古ぎれを、圖の形に切つて二枚用意します。合わせて圖の點線

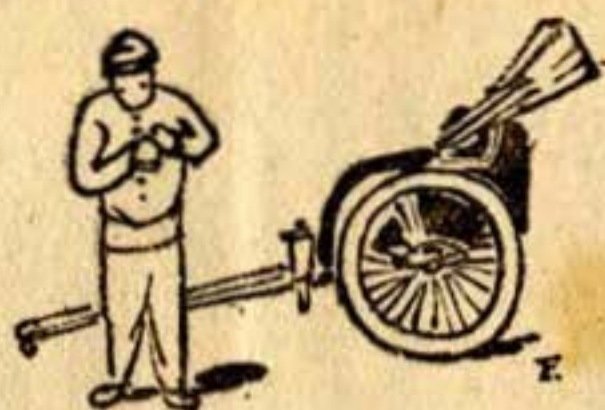
のところをぬい合せます。顔は着物のすそからさかさまに入れて首を着物にぬいつけます。手は手先の方を入れて穴に糸を通してみてつけます。顔を手をつけた着物をうらがえすと人形が出来上ります。

人形は、借り物では、だめです。必ず自分で作つて下さい。人物の作つた人形には愛情が、こもつていきますから、自分の分身のように思われて來ます。限られた紙數では十分に述べる事が出来ませんが、これで判らない方は、私に直接、問い合わせ下さい。ご相談に應じます。(大阪府南河内郡中村西光寺内關西童話會)



筑紫路に

善導寺を訪ねて



大橋 俊雄

元祖法然上人の御廟にぬかずき、三祖良忠上人の靈跡を訪ねたことは幾度びとなくあつたが、そのたびに鎮西に胸をはせながらも、その期會をもつことができなかつたのに、それが偶然にもこんなにも早く訪づれてこようとは、

筑豊線の久留米におりたち、バスをかつて

善導寺に急ぐ。筑後平野は果てしなく、紅葉美しく筑後川に映えて、筑紫の清流も夏の怒濤うずまいていた水害をも忘れたかのように、ゆるやかに流れている。昨夜來の寝不足にうつとりすれば、間もなく「ゼンドウジ」の聲に驚かされて車外に放り出される。「鎮西本山善導寺」の石し

るべに導びかれて町に入れば町並は矢張り門前町としての形態をととのえていようような氣もする。「こんもりとしているあたりが善導寺なのだ」と友の聲、目を見やれば巨大な老樟は天を覆い、櫻、松、櫟、杉の森林は筑紫平野の真中に、ありし昔の面影をのこしているかのよう、ぼつねんと立つている。

總門にかゝげられた「終南山」の額を後に中門から山門にぬければ流石に鎮西本山としての威嚴を今に傳えているように、莊大な寺城、掃き清められた雨あがりの城内は四方の木立と相俟つて莊嚴さを一層加えさせ、二祖上人の御手植と傳えられる樟の太木三株は七百年の榮枯盛衰のあつた寺史の物語りを秘めているかのよう、うつそうととげり靜かに私たちを見つめている。

寺務所に刺を通ずれば、江藤貫主は折よく御在山との由。道づれは吉水省三師、引き入れられて木の香も新らしい法主の御部屋に、水害のこと、知人舊人の追想とか、大本山昇格後の善導寺の在り方など思い出深くお伺いしたが、お聞きする所によれば貫主は鹿谷法念院の忍徹上人の流れを汲み、教學界の木鐸として活躍された獅ヶ谷佛定、土川善教兩師は師の法系で、師弟三代に亘る大僧正を産んでいるとか。

續いて宗史々料の拜觀を願えば、幾たびかの兵亂と同様の災に失せて多くは有しないようだが、二祖上人の直筆の「未代念佛授手印」や法然上人の傳記である「本朝祖師傳記繪詞」

はその最たるもので、血書阿彌陀經や境内繪圖は得難い史料、寶物は次から次へと繰り廣げられ、ペンとノートは進んで行く。二階の御廣間に安置されている御内佛はヤソ退治の

阿彌陀如來とか、私達が日夜御念佛申させていただく如來様とはいさゝか感じが違ふようだ。髪の毛はたれて、上に寶冠をいただき、

口紅は一入印象的で恰かも女性的な、そしてキリスト教のマリア像を模したかと思はれる程、兩者に感覺的共通性をもつた立像で、幡隨

意上人が九州に切支丹宗門が教勢内を張り、

これが契機となつて島原の亂をひき起したこ

とがあつたが、その折幕命をうけた上人が九

州の切支丹改宗のために持參されたのがこの

彌陀像であつたと由來する傳えの詩が醇々と

して述べられた。舟板名號や善導大師の御像

の事なども。

「この邊には春から秋にかけて色々様々な

珍らしい小鳥達がやつてきます。夏の頃とも

なれば五位鷺のねじろとなりますし、秋には

きつゝき・みそさゞい・つぐみと云うような

ものから名の知れぬものまで澤山集まつて」

と。話は中々つきないようだが、餘りおそく

ならないうちに、筑後川べりの横田河原に行かねばならないので、暇を乞えば、「それでは寺内を案内しましょう」と立たれる。

本堂は三響愍海と云う人が天明六年再建された、奥行間々各十五間、方形造りの堂宇である。法主は

私がこゝに晋山して先づ手初めに着手したのは本堂の修理でした。戦時中は軍が本堂と云わず、庫裡といはず居りましたので大分いたんで居りましたので手をつ

けたのですが、この時棟にのぼり、棟札

をみて始めてこの邊で家屋、土藏の地ぎ

ようをつく時「サンヨウ」と云う意

味がはつきりしました。始め、三響も再

建に従事した人たちの中にまじつて地ぎ

ようをついたが、音頭に念佛はどうも工

合が悪い。そこで俺の名をとえよ、と

教えたのでした。今後共「サンヨ」と唱

へれば吾れその家を守護しようと誓はれ

たそうです。ですから今でも筑後一圓で

は「サンヨウ」と云う聲が普請の時

には耳にすることができます。

西の空に日は傾きかける。しかし、何か二祖上人にぬかずくことが出来たような氣持で心は一杯である。そして立ちのき難い。二度と九州の果てまでくることが出来るであらうか。

三祖堂は安産の御祈願所で、春夏秋冬をとわずみごもる人の參詣はたえない。三が産に通ずるからであらうか。その昔二祖上人が博多の津からお歸りの旅宿で難産の女を救われたことに起源するとも云われる。もう二三年も前にならうか、宮城縣の眞似牛に往生寺を訪れたことがあるが此寺は禪寺であるけれども本尊は法然上人であつた。この人がまた此地方では安産の佛になつていたことを思いうかべながらお詣りしたのであつた。その偶然な姿を東北と九州に見出したことを——三祖とは善導(中央)法然(右)聖光(左)の三上人で、此等祖師達の木像が安置され、學問のあるなしに拘らず妻を伴い娘をつれて熱心に御祈願なされる姿は美しい。往生々と云つて死後の世界のことはばかり口にせず、生れると云うことをもう少し強調してはどうなのだらう。朝な夕な讀誦する一枚起請文より

もそのような意味からは生ると云うことに多言する小消息をと、何時か話し合つたこともあつたが確かに考慮して見る必要があるのではあるまいか。

城内におり立ち二祖上人の御廟に詣で、靜かに念佛を唱ふれば、「我が大師釋尊は法然上人なり」と言はれて、その全幅の歸服を元祖にさしげ、念佛の弘通につとめられた敬虔なる態度にたゞ／＼頭が下るのみである。身は嘉禎四年につきたが、その法身は七百年の後までも私達の眼前に在まし、不滅の光は永遠につくることなくとしえに輝き、靈墳——多寶塔は若むして香煙縷々として絶えることがない。

龜の甲臺に建てられた善導寺は叡山の三塔に似せて、藥師、釋迦、彌陀の三堂が恰かも比叡山の東塔、西塔、横川の配置に模して造営され、鎮西の餘黨今にたえることがない。「寺は山門から彌陀堂まで一直線でない方が盛え」と云うことです。知恩院もそうですし東西本願寺は勿論のこと、大寺院は多くそのような建築法をしています。鎌倉光明寺が榮

えないのもこんな所に理由があるのかと思はれます」と申された前光明寺貫主竹石御前の言葉が思い出される。光明寺にはこんな宿命的な哀微性があるのかも知れない。

冬の日の暮れるのは早い。茶毘の地不斷院

どん底

ゴーリキー原作の「どん底」、が岸田國士氏演出に依つて、文學座俳優に依つて演ぜられている。岸田氏はこの最後の舞臺稽古を演出中、倒れて他界されてしまった。初日は、この悲しみのどん底の中で、涙と共に、劇が演ぜられたと言う。

どん底生活をする人々の様々の姿を描きながら鋭く、人間とは何かを求めて行くこの劇には、何人にも、種々の事を考へる問題を與えられる。中でも、常に何かに理由をつけ、目的をつけ、そして喜怒哀樂する人間よりも、理由なしに人をいつくしみ愛し、喜ばせ、そして、そこに自己の安信を求めて行く巡禮の姿が、大きく観客の目を引く。

に回顧をすまし、總門を出ずれば日はとつぷりと暮れ、歸りには高良山にも詣でてありし昔を偲びたいとも思つたが、又の日を約して歸途を急いだ。(十二月十日記)

どん底の生活には、それなりに唯生きておれば、何も苦痛もない。酒をのみ、馬鹿を言ひ、歌をうたい、寝たいときに寝る。しかしこれ等の人々にも、決して人間存在が無視されているわけではない。「死」それは、やはり、大きな課題である。どんな形で求めるにせよ、この生と死の問題は、大きいものである。

それにしても、どん底生活は暗い。人間に希望がないからである。しかし、岸田氏も言うごとく、その暗いまゝにては、人間のみじめさだけが残る。もつと明るいものそんな生活にあつても、更に求めて行くものが明るく欲しい。勿論、單にマヒした精神の自慰としてゝなしに、社會そのものがそうなる様な。

×

×

×

×

華頂の森にこだまする

音楽法要

京都、東山の祖山知恩院では、毎月二十五日、法然上人御忌日に佛教大學々生、東山高校、華頂學園、家政學園、の各生徒及び尼衆校生に依る音楽法要が行はれている。

男、女性混合合唱は、廣い本堂を埋め盡した生徒達の口より流れ出て、堂を満たし、東山の松梢にと傳はつて行く。誠に莊嚴であり參詣者をして、しばし陶然とせしめる。新しい感覺によるこの法要は、新しい時代の

試みとして、大きな波紋を宗教界に投げている。

しかし、これを受けとる生徒の氣持ちには様々にある。今その一、二を、こゝに掲げて若い世代がどの様に、これを受けているかを見てみよう。

東山高校

谷口 修

僕は眞實のところ音楽法要から感ずるものは導師先生の御法話よりも女學生の歌う聖歌の調べの美しさそのものです。音痴な僕にはむつかしい事は判りませんが、理窟を抜きにして、暗い堂内で然も御佛の像を前にして歌うあの美しい聲は堂内を柔かく響かせ、僕の心をすつかり淨めて呉れます。あの純粹な飾り氣のないコーラスの調べがいつの間にか本當に釋尊降誕し給ひし、ルンビニーの園に導いてくれる様です。そして氣高い釋尊の前に合掌する自分の姿になつて了います。あの聖歌のもつ言葉の意味の深さと美しい聲がそうして呉れるのです。

それに反し高貴と稱せられる赤紫の法衣をつけられた導師先生の御法話は定まつて吾が宗祖法然上人の生い立ちを語り、上人の偉徳を讃え、吾等御佛に仕える者は云々……が繰り返されるに過ぎません。と云うのはその法話によつて人々を生徒を善に(善と思います)意識的に導こうとしています。謂はば一種の欲をもつています。この事をもう少し押し展げると、生徒が善導されて行くのに比例しても當該宗教團體が結果に於て榮えてゆくことになるのではないかと思います。然し結果はともあれ僕達が少しでも情操豊かな人間とな

り得たなら、それだけ幸福になるのですからそれで良いのですが、たゞ學校行事として行われているのですから問題は果して各學校全生徒が所謂宗教宗派の中の淨土宗に信仰を求めているかは問題です。

これは理想論ですが、現在之に参加していただきます佛大を始め華頂、家政、東山の四校の生徒會なり關係組織なりが互に協力し合つてこの法要を運営し、求むる者のみが之に集い、嚴かな法要の後には御佛の前で討論なり座談會なりを開き新しい世代に順應出來得る鋭敏な感覺と情操豊かなものが涵養出來たならば非常に良いのではないかと思います。

若い學徒には、この様に批判的な面がある。しかし、眞摯に求めようとする意欲は又無視することが出来ない。

男の學生に對して、女子學生が受けるものは、もつと優雅であり、情緒的である。そこには、本質的な性の相異さへも見る事が出来る。

家政學園高校

片岡万里子

山々の木にかこまれた古い御影堂、歴史の

汚點をもつた御堂である。

私たちの毎月の音樂法要は、毎二十五日にこの御堂で行われるのである、御堂の中の重い冷氣に何か別世界を感じる。そして、私たちが座しきつたとき、そのしずけさについて流れだすオルガンの音に二千餘人の大合唱がなされ、私たちの音樂法要は初まるのである。若い私たちの心からうたい出される「南無阿彌陀佛」は、老人のそれとは又異つた力強いものを感じる。たゞまつすぐに進む若人の、溢れる力が一音／＼に盛られている。がこの合唱がもつと、きれいに合わされば、音樂法要にふさわしい、美しい合唱が終始流れて、しずかな境地を生み出すのではないだろうか。しかしともあれ、その合唱の中を行われる献花、献燈は、ローソクの小さな明りにうつし出されて、幻想的な美しさもあるのである。それは、私たちの心を、それまでの重いものから、脱けださせ、落つかせてくれる。そして、唱される、三歸依文のすんだ獨唱は、黒褐色の厚い柱にしみいる。靜かな、あまりにも靜かな心の一時である。その清められた心に入る、法然上人の徳をしのぶ貴い法話は、私たちの反省を伴つて、私たちの行方の大きな灯の一つとなつて、輝やくのである。

而してその度毎に呼びさまされる私たちの、ねむりかけた心は、一度、一度と宗教的な、高い境地に向つて、私たちを向上させずには、おかまいであろう。進歩／＼と願う私たち青年にとつて、この法要は絶對的な位置にあるものと思う。

かくて、佛教青年會歌の齊唱の響を残してさ／＼やかなこの法要は終る。そして再度繰り返す事であるが、雰囲気の破綻をみさせない合唱が、法要を通じて流れる事が、より一そのぞましいと思ひながら筆をおく。

こうした若い世代の人々でも、佛門に入つた者も又或る見方がある。此處では尼衆學校の生徒の方のを一、二かゝけて置こう。

尼衆學校

伏見誓寛

毎月二十五日にあるこの音樂法要は、現代にふさわしい大變善いものだ、感激いたします。私は音樂が大好きです。あの様な歌を聞き、そして自分でしてゆくといふ事は、今までで最もいい心までが、あの大空のようにつつきりと澄みきつた感じになります。

いくら音楽というものに關心のない人であつても、嚴かな中にも、又やさしいところのある音楽法要には、どんな人でも心をさそわれないではいられない事だろうと思います。これからも音楽法要に力を入れ、より良いものに發展いたしますようにしたいものだと思います。

尼衆學校

石川 淨善

今の世間の若い人々は佛教には、ほとんど無關係の人が多い、その無關係な人々を宗教の中に入れ佛様の御弟子として行く上にも、音楽法要は最も必要なものと思ひます。

けれどもあの大きな知恩院の本堂の中の法要に多くの學生が心を合せて法要であるにかゝわらず、その中には多くわれないが、口先だけでいつている人、遊ぶ所の様に思つてやつてゐる人、歌を知らないから自然に話をする人があることは大變残念に思ひます。そういう人々が多く集つてやつてゐるのだつたらやめてもよいかと思ふ。どこかの旅行の方が「有難い、生徒が司會してやるのだから、當番以外のものも協力してやつてゐる、やつぱり淨

土宗の學校だな」といわれ、ばよいが、暑い時にも寒い時にも多く集つて何をしているのだらう、遊んでいるのかと思はれては今の宗教は、ぜん／＼駄目になつてしまふ。こういふ、不眞面な一部の人は知恩院にあがらず一日を反省會や寺院見學、などを通じて教育

新刊紹介

田中順照著

淨土宗

著者は長らく佛教大學、高野山大學等に哲學を講じつゝ、信ずる者の悩みを負うて思索の道を歩まれてゐる。本書の内容は、立教開宗、淨土門の意義・特色、念佛・佛・信と行、淨土等について、豊富に法然上人の法語を引用し、新しきに阿ねず私見を加へず要領よくまとめてある。しかも、淨土といふ問題について——淨土とは死後の世界でなくてはならぬ、本當の安らかさは墓場の彼方にいたるまで容易に實現されないことをしみじみ體驗したものには、死して初めて淨土に生まれることができる云うことは心からうなづかれ

をやりなほした方がよほどよいかもしれぬ。眞面目な大多數の人々が、自分／＼の進む道だと思つて眞剣にやつてゐるこの音楽法要はこれからの日本にも又佛教宗教にも最もよいものと思ひます。又外國への良い御手本にしても良いと思ひます。

よう。この意味で淨土教は「絶望」を此世にみる人の必ずくぐらねばならぬ門である——といつたふうな説き方に此書の特色が窺へる。たゞ凡六・三九頁の中に一應の大綱を説く事を主にされてゐるから、わかりやすくといふ努力がなく、又、結論的な言葉で示されるので、一般にはやゝ難解かも知れないが、此を輪讀會、講演會のテキストとして指導者が十分にこなすならば、手頃なものと云へよう。(發行所——東京都豊島區長崎六ノ二四鹿野苑。本會にても代理致します。定價二五圓、送料八圓)

×

×

×

×

×

×

いけ花の制作と観賞

(観賞) 上田 純明

(制作) 上田 理和

一、前書き

佛教の譬え話に盲人が象を語り合うというのがあります。一人の盲人は象の足に觸つて見て、象は太い桶のようなものだと言います。一人の盲人は耳に觸つて見て、象は肉の厚い團扇のようなものだと言います。尾に觸つた盲人、腹を撫でて見た盲人、その他いろいろ象のことを語り合うのですが、象全體の姿を知らずにたゞ論じ合うばかりです。

この頃特に冷い戦争が激しくなつて、世界観が違ふとか、人類の幸福の目的は、こつちだとかあつちだとか言つて、昔の大砲や軍艦の戦争よりもつと恐ろしい殺し合いをして居

りますのは、どうもみんな盲人になつてゐるからだと思われてなりません。

政治や思想の問題のように花々しく見えなくとも藝術の問題についても深刻な争いが、その本質のつかみ方からはずれた醜い結果を見せていることも嘆かわしく存じます。藝術としての「いけ花」の道も、美を欣求する人々にむつかしい課題を興えて居りますけれども私達は東洋と西洋という大ざつばな領域について先ず考えを進めて行くと、落着いた結論が出て来るように思います。

一二、抒情ということ

東洋の藝術の特色は抒情精神が樞軸となつ

てゐるのです。音楽も美術も演劇でさえも抒情精神が過重にあらわれて居ります。それは道徳にも宗教にも、その他の世界観や生活態度にまでも浸み透つてゐるように思われます。かりに藝術だけが過重に抒情精神を持つてゐるというのなら、一種の變態的なものとして是正するように努力もしなまればならぬと言えるかも知れませんが、本質的に東洋人の生命の基盤となつてゐるものとしたら、それを抜き去ろうとするのは全く自己否定自殺するのと同じです。

西洋のものはすべてギリシヤの古代文化を母胎として、ギリシヤの世界征服の歴史の中に謳われた敘事詩の發展で、ヘーゲルという哲學者が浪漫主義を對立させて近代の意味を高くかゝげたのですが、やはり一貫して現われて来るものは劇詩的な力強さです。劇詩を求める心は烈しい力と力との闘争による統一です。劇を喜ぶ心は闘争を喜ぶ心から来るのです。西洋の文化はこの闘争による統一ということが、人間の行爲の本質であると考えています。

この根本の問題が、宗教でもキリストの愛

と佛教の無我の精神に特色を見せて、人間の
本質を規定しようとするのです。キリストの
愛は人間本義が重大な要素となつて、人間の
葛藤を愛の平和によつて神の榮光を祈るので
すが、佛教の無我は一切衆生と共に生きて行
こうとする大自然のすべての有情無情がいつ
しよになつて救われようと祈ります。これは
抒情詩なのです。抒情の内容は世界共通にい
ずれの民族でも自然愛と戀愛とから湧き起る
ものなのです。自然も人生も融合一致、無我
愛の平等觀で、あらゆるものに生命を觀じ殺
生を罪とするわけになつて來ます。

三、花を見る心

いけ花は花のいのちを、この東洋的な抒情
精神で觀ずることと始まり、そのことによつ
て私達の生活の本質に觸れる問題を含んでい
るものとして、その高い價值が認められる時
代が參りました。私はこれから少しづつ「い
け花」の形象を藉りて人生の本質に觸れた問
題にぶつつかつて行つて見たいと思います。

四、花材と花骨

いけ花を嗜むのには先ず花材と花器とが問
題の支えであります。花は器によつて生き、

器は花によつてその美を完うしようとしま
す。「いけ花」では花材と花器とは一如です。
この一如は一切の繋縛を忘れた自由無碍の精
神で取扱われなければなりません。器は人間
が造り、花は自然に咲くというのは單純な歴
史觀で、花も文化の今日では温室物あり、人
工でその大きさと色彩も勝手に變えられてい
ますが、逆に花器も場合によつては、作られ
た花品というものだけに限らず、何でも花器
として取扱うことも出来るわけです。それは
こういうわけです。

五、創造の悦び

大自然の谷間や野邊に咲く花は、實にすば
らしい美しさです。然し花材とする時、その
野花は切り取られた根もなき植物で、既に植
物本來の姿ではありません。いけ花の仕事は
この根なし草を、もとの自然の姿に復元しよ
うとするような愚をくりかへすのではありま
せん。それどころか、その花が自然の姿では
表現されていなかった、人間への深い親近感
花と人間との融合一如の姿をしようとする抒
情精神の躍動なのです。こゝに藝術という役
割が演ぜられ、その時、個性の眞實性という

ことが重大な問題となつて來ます。個性の眞
實の欲求が素樸な感動で物に觸れるならば、
花材は生きた植物の花だけに限つたことはな
いという態度にまで自由に擴がつて來ること
になります。このことについては漸次觸れて
行こうと思いますが、勅使河原氏あたりが特
に盛んにやつている工作のようなものでも、
「會場花」とか「商業花」などを強調する秀
抱氏あたりの行き方も、一應肯定してよいと
思われます。花器といつても、小品ならばベ
ン先のさやでさえ使われて居ります。それで
私は古典の花の問題と自由花或は現代花と、
時により、兩方に觸れてお話をすゝめて行く
つもりです。

格に入つて格から抜ける古典花の話は能藝
術や茶の藝道の深い問題と同じようなことが
度々出て來ると思いますが、私は最初、現代
の激しい世相の中に立つてゐるお互いが、ピ
ルディングや應接間やコーヒーの香の中で親
しみ易い現代花の話から始めようと思いま
す。

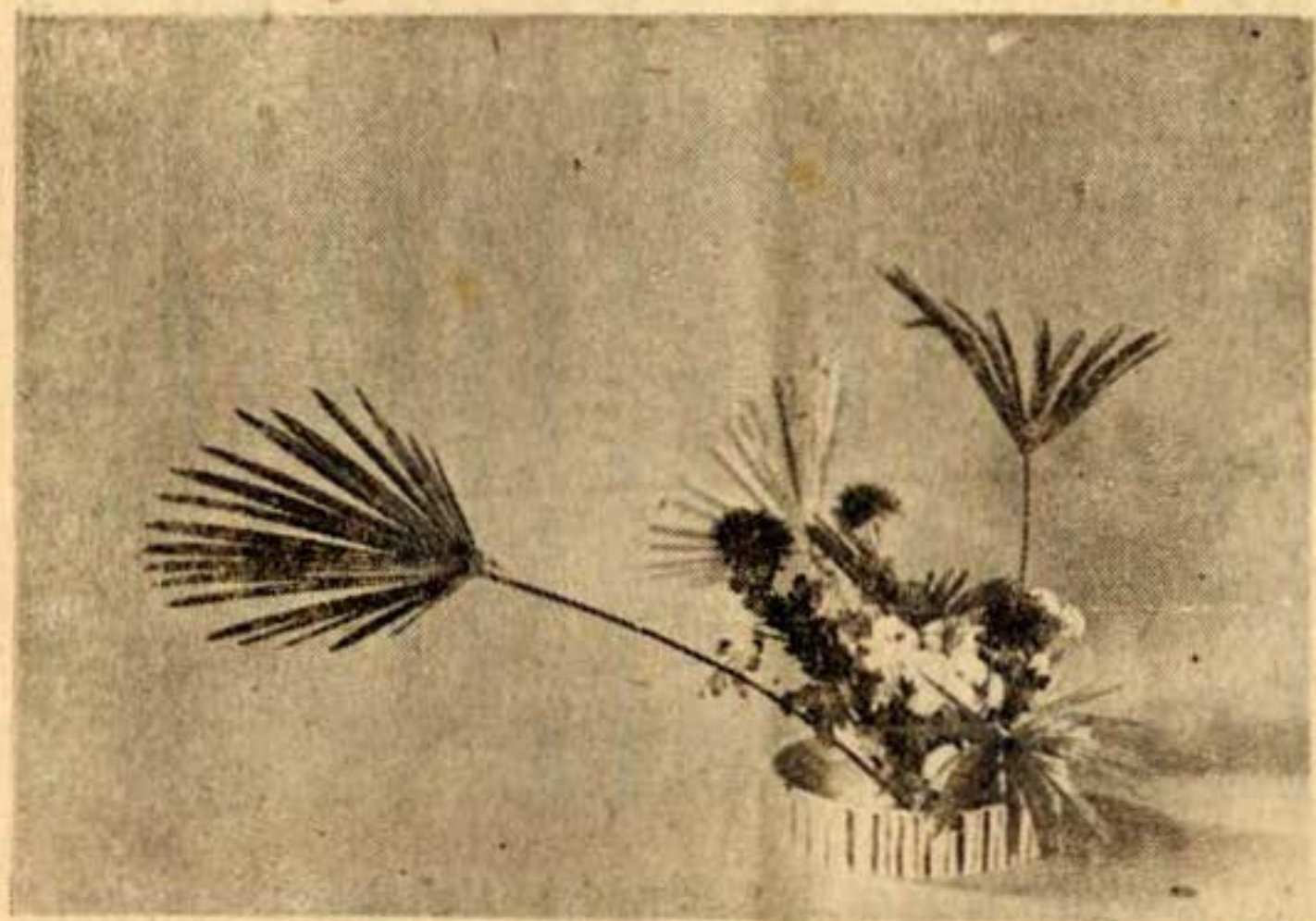
六、三月のいけ花

これから段々温かくなると自然界は花の世
界です。お雛祭りが和やかな風景を漂わせま

す。三月といえば直ぐ三月三日のお雛祭とい
ゝます。然し三月上旬の節句は三月の上の巳
の日は不祥不吉を除くを除く日なので、「ひい
な遊び」から発展して起つたので、白酒や草
餅を供えて祝うわけですが、雛祭りの花とい
えば桃で、矢張り支那から傳つた武陵桃源
の故事から來たわけです。然し春蘭、木瓜、
まんさく、菜の花が咲き誇り、アネモネ、ヒ
ヤシンス、パンジー、クロッカスが咲き、こ
の頃は又カトレアの花が一輪數千圓という高
値を呼んで王座を占めていきますから、桃と
菜の花に限るなど、きめてかゝるのは、保守
的な安易に閉じ籠ろうとする態度で、藝術の
花の美に對する本質には觸れない。それでは
不自由なのであります。

大體三月の花は梅や松と違つて、花も木振
りも元來が處女の姿に似て天真爛漫の感じが
強いです。そこに私達の民族のふるさとを見
出そうというわけです。陽春のふくらみと豊
かさ、素直な線、生々としたとりぐの色彩
これが桃に因んだ感覺であり、陽春の呼吸で
す。そこで桃と菜の花を飛び超えて、私は三
月お雛様とは關係なしに、「線と色彩」の花を
制作の中から取り出して、先ず今月のお話を
おしまいにしましょう。

線と色彩の花



花材 棕櫚 菊(中菊・エンジ色・小菊黄色)

花器 縞模様中形鉢

形態 斜 態

制作 古流現代華 上田理和

左方へ流した直線の棕櫚の伸
びが「心」となります。大膽
に伸ばした棕櫚の直線は、黄
菊のマツスと「用」の部分の
臘脂の菊のあしらいの色彩と
そのポリューム(量感)によ
つて、バランス(均衡)が考
えられて居ります。しかも棕
櫚の線はリズムを感じさせる
三方の放射の線によつて、よ
く空間を作つて、花器の縞模
様を律動の自由へとそつて行
きます。棕櫚の葉の廣がり
線の放射を一層快い律動の餘
韻として感じさせようとして
います。菊の色彩によつては
作品の氣分も變化したものと
なりましょう。

春の彼岸になると「おひがんに御往生とはけつこうな」と云はれて西化した田舎の父を想ひ出す。僅か数日の患で枯木が風に折れるが如く、あつけなく逝つた。もう今年で七回忌だが、兼ねて之までに完成しようとしてゐた譯經の脱稿が果たされず、墓標撫然として經ヶ峰下しに鳴つてゐるのであろう事を思ふと不所存が悔やまれてならない。

私が黒衣を着たのは十二、三歳と覺えるが譯もわからないのに朝早く本堂に引張り出され——といふより床からごぼう

を抜くやうに引つこぬかれて勤行をやらされた。やれ木魚が早い、鐘の間がわるい、聲が小さい

いと小言の連續で新發意は閉口した。

でも負けぬ氣で早朝から聲高らかにやつてゐると、ある塔頭のばあやさんが、まあ可愛らしいと云つて御菓子紙に捻つて、そつと持つて來た事もある。そうになると士氣は上るのだが、「道心」とは名ばかり道心では、さぞや頼りなかつたらう。

朝食前に本堂の掃除がある。仕事は見つけてでもやれと口ぐせだつたが、當時の紅顔の少年は何の意味も無かつた。只、掃除が済ま

ないと朝食にありつけぬといふ事がはつきり判つてゐただけである。冬日も温かい湯で廊下を拭くと艶が落ちると云つて、よほどでないといふ湯は用ひなかつた。之等は一日として缺かされる事はなかつた。

佛前には常に生々として清らなる華を自ら作り自ら獻じた。法衣もいがかげんの物は着用せず、威儀を正して帯し、机帳面に管理した。

云つてみれば一掃除、二勤行に徹しきつ※

一、掃除 二、勤行

眞野龍海

※た昔ながらの僧風がそうさせたのであらう。之は或る意味では僧界の停滞性をも内蔵するものもあるが、佛教者の氣骨を形成する一つの有力な過程であり、自己を空しうして佛に奉仕し、佛弟子たるの自覺の場として尊いものである。僧堂を立たしめる信行を容れる器とでも云ひ得よう。

私の場合、之と最も直面して取くんたのは昭和十八年の知恩院に於ける加行の時だ。一掃除、二勤行が私の全てであつた。講義も、

兵隊になる直前の行僧たちの煽動する坐りこみ騒動も、關心事でなく、見送るのみであつた。

丁度一月の寒中で、曉闇に氷を割つて驚張りの廊を拭いた骨の髄までしみこむ冷たさは忘れも出来ない。又、心からの大音聲で、稱名しつゝ床をふみならしての昇殿する姿は、げに／＼しくもあつたらう。

だが之を機として私の中に借りものでない何か動きはじめたやうに思ふ。其時は加行

といふ環境による感情的な興奮ではないかと思つたが、今となつて考へてみるとそうばかりでもない。事、佛教に關しては誰

がなんと云つても後へ退らぬ意地の胎動を感じた。漠たるものながら、之は快くてならない。きつと成長するに違ひないと思はれるものであつた。

こういうふうに通んでいつた下地は長い間の回顧によると、何といつても小僧時代のわけのわからぬ一掃除、二勤行の形式を得た事が一つの要因ではなかつたかと考へる。

悟らない周利槃得たる事を常におそれつゝ、之の文を認める。

サロンの宗教

「ねえ君。僕はね、佛教にはクリス教にないよい教へが一つあると思うんだがね。それは「衆生の恩」として何事も感謝する事だよ。こうして語りあえるのも衆生の恩。茶や酒の一杯が飲めるのも衆生の恩。僕が原稿料もらえるのも衆生の恩とね」

先程から、サロンでは盛んに宗教論がブチ撒かれていた。鼻に汗をかきながら、大いに氣炎をあげて居られるのは、奥野信太郎先生である。

紫煙に濁つた空氣が、人の呼吸とまじりあつて、外の寒氣はこゝではない。ガラス窓が汗をかき、ガストロブが遠い唸りの様な響きを立てゝいる。青い礦物燃焼の光りは如何にもこの雰圍氣にふさはしい。

「その最後の原稿料と言う衆生の恩には、大いにありつきたいね」

某作家の横槍が、ドット笑いを起し、サロンの空氣をどよめかす。

「インテリともあろう者がだね、無宗教でござります等と、まじめくさつて言つてゐるが如きはチャンチャラおかしいぢやないかね。彼等は無關心なんだよ。宗教を本當に否定し得る人は、それだけ宗教に關心を持つてゐるんだよ。神や佛の抵抗を感じてゐるんだよ。」

ガラスを勢いよく卓にたゞきつける。抗議しかけた女給さん

の言葉は絶ち切られた。

「君。人間たる者がだね、衆生の恩に對して鈍感になりすぎとつては駄目だよ。衆生の恩。衆生の恩だよ。何事もね。

氣炎とともに空氣がゆれる。大先生の「衆生の恩」と言う説法は、るゝと流れる。耳を傾けているもの。ソッポをむいて、勝手なことをしている者。スバスバたばこ吸つてゐるもの。そして、そんなことは關係なしに、説法はつゞく。

「文學者等でもそうだ。宗教に無關心ぢやロクな作品はない。そうそう。武田泰淳君も此の間、僕が今言つた様な事を書いてゐたね。武田君は、その意味でも、立派な作家だ」

話しは文學論にと飛んでしまつた。先生の文學論を聞きながら、泰淳氏の「異形の者」や、最近丹羽文雄氏の書いた「青麥」の事などを考へる。僧侶のものした自己批判、いや自己紹介の様な文學なのだが、聖衣の裏にある人間の欲情が、それ故により以上に異様にうつると言う事を考えつゞける。あの浮世繪の女人の肢體は、まことに艶麗なものだが、あれをカトリックの尼僧風情にしたらもつとなまめかしいだろう。作家はそこを利用する。しかしあのあくどいばかりの描寫を、たゞそれが文學なる故にとつて見過して置いてよいのだろうか。それは、單に聖衣をきたと言うだけから來ることであらうか。人間なのだ。人間なのだ、と叫びつゞける裏にも、何か不條理なものが流れて居る。いや、そうした叫びがあればこそ、人間なのかも知れない。作家の求める人間像は、又われわれの求めるものだ。信ずる者。信じない者。無關心なもの。無宗教なもの。色々

様々な思はくが、勝手ないきぶきとなつてサロンの中を飛び廻る。

畫家の富山妙子さんがニヤ／＼笑いながら聞いている。

「畫家がカンバスに向う氣持ちは、あなたにとつては何ですか」

「最も安定した心の置き場ですね。勿論私も人間よ。だから孤獨も感じ、色んな欲望も走りますわ。しかし、どんな欲望が満されるよりも、この繪を描くときの場が一番私を救つてくれるの」

「其處にあなたの宗教があるんでせう」

「宗教とか、何とかそんな名前等どうでもいいのよ。いえ、私には、神や佛等立てようが立てまいが、そんな事に關係なしに、已にそれが私なりにあればそれでいいの。一體、神とか佛とか、人間が規定出來て？」

「自己を通して絶對者を發見しようと言うんですね」

「そんな難しいものじゃないのよ。私には、果してそれが宗教か何か知らないけれど、いつ、いかなる所にも宗教があるとも言えるの。嬉しい宗教、悲しい宗教。それはすべて私が、そこで生きているその場にあるのです。」

「生きている、その場にある宗教」

そうだ。サロンの宗教は、そんな宗教かも知れない。少くも無關心でない人は、何かを自分の生きているその場に求めようとしている。もつと言え、自分の身も心も安定する場所を、そこに求めている。そこには、「家」とか、「社會」とかを離れた

孤獨な一人間のみの生きる——本當に生きる——場が求められている。最もな人間の姿は孤獨なのだから。そして、その世界では、善、不善、淨、不淨等と言う、こざかしい智慧にて律せらるべき何物もない自由な孤獨である。サロンでは、そんな中に、各人の宗教が求められている。

ガヤ／＼と言う論争が、一つのかたまりとなつて、サロンの中を浮き沈みする。それは何宗でもなく、何派でもない宗教が生きたし生けるものの思惑として、このサロンの中に流れているのだ。生きた人間のいきぶきと共に、生きた宗教として。

○

雪さえ加はつた外の寒氣の中では、騒々しい車馬の響きが流れている。右往左往する人間が居る。遊興に耽る者。泥まみれで働いている者。何の思惑も無くブラ／＼歩いている者。喧嘩をしている者。食うに事缺いて物乞いをしている者。生れ出でんとしている者。死に瀕している者。

數多い人間は、同じ一瞬時にも、様々のことを、様々な所で爲している。それはほんの長い時間の一刻に過ぎぬのであるが。サロンにもこの一刻が通過する。しかし、あの阿修羅の巷はこゝにはない。激しい一日の闘ひを終つた人々が、僅かないこゝを求めて、こゝに集まる。忘れかけた命の洗濯が始まる。静かな雰圍氣の中で、自己がみつめられる。そんなときに、人々は何か生き甲斐をあれや、これやと求めて行く。サロンの宗教もそんな所に湧いて来る。

安居香山

人間の探求

——法然上人「小消息」講義 (三)——

佐藤賢順



宗祖の時代

さて再び本文に戻りますが、「法滅以後の衆生なおもて往生すべし、況んや近來をや」とはどういう意味かといひ

つた後でさえも百年間は念佛で極樂往生できるのであるから、まだ末法に入つたばかりの現今では、往生できないはずがあらうか、という意味であります。

ますと、法滅は末法の萬年が過ぎてしまつて、佛法の滅する時をいふのです。釋尊の説かれた經文が悉く滅盡する時であります。しかし釋尊はその時でも、なお最初の百年間だけは念佛の教えを世に止めて、念佛する者を、極樂に往生させてやるとされたのであります。すなわち無量壽經の下卷に、「當來の世、經道滅盡せんに、我れ慈悲哀愍を以て、特ひとり此の經を留とどめて、止住しじゆうすること百歲ならんに、其れ衆生あつて、此の經に値あう者は、意こころの願う所に隨つて皆、得度すべし」とあるのはこのこととあります。唐の善導大師は、「萬年に三寶滅す、此の經、住にゆうすること百年、爾その時、聞きいて一たび念きぜんに、皆、當まさに彼かしこに生ずることを得べし」と釋しました。況んや近代をやとは、法滅に入

法然上人は遠く龍樹の思想は勿論、シナの淨土教諸師の傳統を受けて、末法という時代意識の中に育ちました。そして日毎ひごとに奈落へ落ち込んでゆくような世の有様を眺め、人の心を見つめました。そして「選擇集」の初に書かれてゐるように、聖道門を捨てて淨土門を選ぶのは、聖道門は今時いまとき、悟り難いからであると言われて、その理由は、「大聖を去ること遙遠である」からだとされました。そして、「當今は末法、是れ五獨惡世なり。唯、淨土の一門のみあつて通入すべき路なり」と決斷されたのであります。

鎌倉時代の中頃に出來た考えられる「一言芳談抄」という本があります。宗祖をはじめ二祖、三祖の言葉を數多く集録してある「信仰の書」ですが、それに次のような一節

があります。「寶幢院本願云く、むかしの上人は一期（一生涯の意）道心の有無を沙汰しき。次の世の上人は法文（ほうもん）を相談す。當世の上人は合戰物語、云々。」寶幢院本願とはどういう人かわかりませんが、時世を諷刺してうまいことを言つたものです。佛教が實踐から戲論に流れ、ついに佛教を離れて世間話になつてしまふその頃の佛教界の一面が巧みに語られています。末法の世になると眞の道心者を求めることは、街（まち）の中に虎を求めるよりも困難である、と書いたのは、傳教大師の「末法燈明記」ではなかつたでしょうか。傳教の頃でさえそうでしたから、宗祖の頃には、末法は現實の事實として、ひしひしと迫つていたのであります。

善導大師の人間探求

世の中は、釋尊を離れば離れるほど、次第に悪くなつていく、今は末法の世である。人間の性質はだんだんと劣つてきて、難しい修行をする力もなくなり、欲望に追い廻され、罪惡に覆われた醜い姿となつてゆく、しかしそれでも佛の名を唱えてお救いを願うならば、必ず救い導かれるというのが今までの教えのあらましでした。そこで次に第二の問題である人間的實存の探究、すなわちあるがまゝの人間の姿を把えるということに話を進めましょう。本文では、

我が身わろしとても疑うべからず、自身はこれ煩惱具

足せる凡夫なりとの給えり。

という一段であります。勿論、一應この一段に限つたのでありますが、眞の人間の反省ということは、淨土教の出發點であり根底でありますから、この話題もまた、どの一段を取つて考えてみても、例えば「西方を願うは十惡五逆の衆生の生るゝ故なり」にしても、「罪人なお生る。況んや善人をや」にしても、どの段とも深く關連していることは、いうまでもありません。

初めに申したように、この一段のうち、「わが身わろしとても疑うべからず」は上人のお言葉ですが、「自身は是れ」以下は、唐の善導大師のお言葉の意味を述べたのであります。大師の「往生禮讚」に、「自身は是れ煩惱具足せる凡夫なり。善根薄少にして三界（欲界、色界、無色界）に流轉（りゅうてん）し火宅（かたく）を出でずと信知す」とある一句の意味であります。法然上人は善導大師の教えによつて淨土宗を開いたので、この二人は時代からいつて五百年の隔りがあり、地域からいつて遠く離れていますが、法然は専ら善導の僧統を受けているのです。法然は慧心僧都（えしんそうどう）の「往生要集」を通して、切々と迫つてきた末法の世の苦惱を知り、戦き悩む時代と共に悩んだのであります。いかにしたならば救われるかという解決は、偏（ひとへ）に善導に依つたのであります。「偏に善導に依る」——これは上人が幾度か繰り返した言葉であります。晩年の上人は善導を「彌陀の化身」とまであがめて

如來の本願へ信順する心を、そのまゝ善導への信賴に向け
ております。「善導はまた凡夫にあらず。阿彌陀佛の化身な
り。阿彌陀佛のわが本願を弘めて、衆生を往生させん料
に、かりに人と生れて善導とは申し候なり。その教えは申
さば佛説にてこそ候へ。あなかしこ、疑いおぼしめすまじ
きにて候」(正如房へつかわす御文)と書いているほどであ
ります。従つて自らの眞の姿の捉え方、自己の反省、人間
觀においても、偏に善導の考え方によつたのであります。
善導は自らの人間としての本質を探究して、「煩惱具足の凡
夫」であり、「善根薄少にして三界に流轉し火宅を出でず」
と見極めたのです。また別の所では、大師は「自身は現に
是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來、常に没し常に流轉し
て出離の緣あることなし」とも書いておられますが、これ
も同じことであります(觀無量壽經疏)。

およそ佛教には大きく分けて二つの人間の見方がありま
す。一方は、人間には誰にも佛性があり、人間は修行によ
つてその佛性を開顯して佛となることができるという見方
でありますし、他の一方は、誠にその通り人間には貴い佛
性があるとしても、それを開顯する力がなければ仕方がな
い。今のわれわれはとうていそれを成し遂げる力はない、
とすれば自分の力で修行して解脱しようなどという望みは捨
て、人間以上の力に任せて救済してもらわなければなら

ない、というのです。一方は人間の力を高く評價するの
ですが、他方はその無力無能なことを見極めるのでありま
す。一方は可能態としての人間に重さを置くのですが、他
方は現實態としての人間を見定めるのであります。そのい
ずれの考え方をするかによつて、その人の宗教觀も全く異
つてきます。善導大師は現にあるがまゝの人間を、少しも
買いかぶることなく、在るがまゝに見たのです。煩惱具足
の凡夫、善根薄少の凡夫であるからこそ、如來のお救いに
あずかることができます。大師は先に引用した
「往生禮讚」の文に續いて、「今、彌陀の本弘誓願及び名號
を稱すること、十聲一聲等に至るまで、定んで往生を得と
信知して、乃至一念も疑心あることなし」と書いていま
す。

法然上人の人間探究

法然上人は少年時代に勢至丸と呼ばれたと傳えます。十
五才で比叡山に登嶺して持寶房源光の室に入るときには、
叔父の觀覺得業が持寶房宛に、「進上、文珠像一體」という
添狀をつけてやつたといふます。勢至とか文珠とかいうの
は知性の象徴であります。學者としての上人がその當時、
「智慧第一の法然房」とうたわれたということは、周知知
られています。しかしそれほどに優れた素質を持ち、衆を

拔ん出た頭惱を持ちながらも、戒・定・慧の三學とか、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧というような長い長い年月を要する困難な修行にはとうてい耐えられるものではないことを自覺されたのです。「もし智慧をもちて生死を離るべくば、源空いかでかの聖道門をすてゝ、この淨土門に赴くべきや。聖道門の修行は、智慧を極めて生死を離れ淨土門の修行は、愚痴にかえりて極樂に生ると知るべし」と自身の能力の實際を見極めたのです。愚痴に還える、還愚——こゝに淨土教の出發があります。

聰明な知性も人間の救いということに關しては、至る所で障壁にぶつかつて挫折し、人間の知性ではどうにもすることができない問題がいくらでもあることに氣づかれたのでしよう。如來の救済力、死後の世界のことなどについては、如何に優れた知性もこれを知ることゝも確めることもできません。知性には限りがあるのです。小賢しい知性を捨て愚痴に還えらなければならぬ。こうして上人は「一文不知の愚鈍の身」としての自らの姿に目醒めて、「尼入道の無智のともがら」に還えつたのであります。一文不知、愚痴、無智——これが人間の偽らざる姿であります。

こゝで心に留めておくことは、佛教で智慧というのとは、たゞ物事についての知識を持つてゐるというだけのことではないということです。學問の深さや頭腦の良さだけをい

うのではありません。佛教で智慧というのは日常の生活、行いにも關係があるのです。むしろほんとうの生活、正しい行いは智慧がなければできない、といった方が適當でしょう。智慧とは、世の中の事は悉く縁起により因縁によつて生じてゐる。財産も品物も人間のこの生涯さえもそうである。縁起であるからその裏をいえば空である。一切は皆空である、と知ることであつて、皆空であるからこそ、財産や品物やこの私の存在にさえも執着せず、私本意の身勝手な欲望を棄てゝ、無私になつて世のため人のために盡さなければならぬ。正しい行いとは無私から爲される行いである——こう考えるのが佛教であります。ですから、佛教の智慧は實踐でなければならず、實踐そのものであるといつてよいのです。智慧は今日いうようなたゞの知性ではなく知性と徳性の兩方の根底となつてゐるものです。従つて無智ということとは、何も知らないというだけでなく、何一つ正しい行いを行うことができないという意味を持つてゐます。無智は罪惡と結びつくのです。上人の法語に、「我はこれ烏帽子もきざる男なり、十惡の法然房、愚痴の法然房が、念佛して往生せんというなり」というのがあります。また「智慧の眠盲い、行法の足なえたるこの頃のわれら」と御自身の姿を見極められました。いつも「罪深くして無智の者」というように、知性の方面からと道德の方面から

と、兩方の言葉が重ねられているのは、そこに何か深い意味があるように思われます。こゝに何とも言いようのない人間そのものゝ不安、はかなさ、頼りなさが潜んでいるのです。底知れぬ深淵を覗くような不氣味さに戦くのです。

いつの時代にも人間は人間のほんとうの姿を探し求めます。現代の人間探求はどうでしょうか。それは實存主義という名で呼ばれている系統の思想です。これも大きく分けて二つに分けられて、その中には宗教的な目的を持ち、救済の希望を持つたものもあります。現代の青年たちの間に流行しているのは、絶望的な暗い人間觀で、人間を、絶望、不安、懷疑、孤獨、嘔吐というような、忌^いわしい在り方にあるものとして追及するものです。人間の飾りけを取り去つて裸にしてまつたのです。ありのまゝの人間を掴んだという點で、それは誠に結構ですが、人間は絶望し放しで、そこには何の救い也没有せん。法然上人は今の言葉でいえば優れた實存主義者です。しかし上人の實存探求は絶望のし放しではなく、人間のありのまゝの姿を見極めたからこそ、如來の大悲本願へ歸命し信順しなければならぬことを教えられたのであります。(續)

〔小消息〕全文は正月號に掲載してありますから、御參照下さい。〕

藝に生きる

謠曲界の重鎮、寶生流の野口兼資氏は、九州の旅先で演能の最中に舞臺で倒れ、その後間もなく逝去せられた。藝の達人のこの死は、その世界の人々の限りない悲しみであつた。藝に生き、藝に死なれた上からすれば、野口氏にとつて本懷であつたであろうが、こんな事を云うのも、愚者の繰り言にしか過ぎない。

當日、演能の最中として、さぞかし混亂した事であろうが、その混亂は、觀客の側にあつて舞臺にはなかつた。倒れられた瞬間から演能は中止せられたが、演能者は、總てそのまゝの姿で微動だにもしなかつた。丁度、映畫のフィルムが切れて、突然映面が停止したのと同様であつた。

やがて、野口氏は運び出され、代役が舞臺にあらはれ、野口氏の倒れた位置につくと、再び地謠ひが始まり、演能は何事も無かつた様に續けられた。その間休止すること約十五分。そして、それさへも演能者には意識されていない様であつた。

至藝の世界には、藝への一途なものだけで、他に何も無い。一人の人間が倒れると言う事は、こゝでは些細な問題なのだ。丁度悟達の境地の様なものだ。現象する一事に一喜一憂する迷いの中には、こうした世界はないのである。

野口氏もさる事ながら、野口氏と共に演じていた人々も立派なものである。藝に生きた野口氏の最後を飾るのに、餘りにも莊嚴で、而も悲愴ではないか。

保育欄

○三月の三日乃至六日七日は各園に盛大に雛祭が行われた。

○内山憲尙氏は毎月曜テレビのおじさんとしてNTVに活躍されてゐるが、この八日に同氏作・玉山英光氏作曲「赤頭布」が好評であつた。尙、同氏、東京保育學校は初旬々日に渡つて十周年記念行事を舉行した。

○淨保連東京例會は二月二十七日、隆崇幼稚園で行はれ、卒業式に關し種々協議し、三月八月には明照幼稚園にて、本年度皆勤者の母に授與される椎尾法主の色紙を配分した。

○三月十七八日頃から卒業式であつたが、童心に佛心を育まれて巣立つ兒等の幸を心から祈りたい。

○本欄へは、大小不拘臨時ニユースをハガキで送り下さい。取捨は編集部にお任せ下さい。

宛先 東京都港區芝公園五ノ十
法然上人遺仰會「保育欄」係

芝園だより

◎いくめぐりして迎える彌生ではあるが、その度に思うことは、地虫さえ這い出る春にして、なすなく暮れる日々の多いこと。

近頃、妙に自分にのみこだわりの感じられて、本欄でおこがましい口がきけなくなつてしまつた。氣焰の方は若い同人にまかせることとして。

◎今年も學窓を巣立つて社會に出て行く若人の群れがある。その上に、幸あれと祈るや切であり、且つ、此等の人々の一般社會への進出が、百の說法、千の布教にも優さつて、佛教の正しい信仰の宣布に役立つよう望むや切である。

◎一方、宗團の側でも、折角意氣に燃えて船出する此等の人々の上に、永く、慈愛のまなこと篤い配慮をそそいでやつて貰いたいものである。

◎一讀者の苦言に、近頃少し誤植が多すぎる。ミスの多いことは編

集者の主觀の強いことを示すのだと。記して謝します。(竹中)

○浄土教がいろ／＼な意味で問題にされている。岩波「思想」の田村圓澄氏の論文がその一つ。或る雑誌の特輯が又その一つ。本當の問題になるときは、必ず隆盛に向うときだが、批判されてあたふたする様では何にもならぬ。大衆のための宗教は、いつも大衆と共に生きて居る宗教である筈である。

○N・H・Kの花まつり番組の一つを、浄土が提供することになつた。どんなものが出るか楽しみにしていて下さい。

○趣味の欄として、今月から上田純明先生御夫妻の活花を掲げることにしました。季節に應じたものとして、家庭婦人の方々の愛讀を特にお願いいたします。(安居)

○私共ベアリングへの油が切れたわけでもなく、又皆様の御好意の動力減のわけでもなく、只、ベアリングの編輯陣と業務部が少々私事のため、二月號は中下旬の發送

と相成り、申譯けなく思ひます。御問合せの方々には御手数をかけました。三月號も彼岸號として彼岸前に送れる豫定でしたが。○竹中氏の死について文は、近頃しみじみと讀まれる。が、氏は決してしみじみとしてゐず元氣です。(龍海)

誌代 會費半々年二百圓、一年四百圓(〒共)。毎號定價三十圓(〒四圓、前金切次第清算通知申上げます。確實便利な振替を利用して下さい。

「浄土」 三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿八年二月廿五日印刷
昭和廿九年三月一日發行

(定價三十圓)

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人遺仰會

東京港區芝公園五ノ一〇
電話・芝(四三)一三二八

大正大學學生募集

學部・大學院

募集人員 大學各部 二〇〇名 大學院 四〇名

學部學科 佛教學部 佛教學、梵語學、淨土學、天台學、眞言學、哲學(東、西)、史學、國文學、中國文學、米英文學、社會學、社會事業

夜間授業 佛教學、日本史、國文學、社會學の各專攻

大學院 文學研究科(佛教學、宗教學、國文學各專攻)

出願期日 第二次 三月九日—三月二十五日(大學院・學部)

入試期日 第二次 三月廿六、廿七日

入試科目 大學院 國語、社會、理科、外國語

認定試験 大學院 論文、外國語(英・獨・佛の中一)

奨學制度 (舊制中學卒業者の大學入學認定試験は三月五日)

特典 本學独自の奨學生、淨土宗奨學生、日本育英會奨學生

人員 第一學年(宗教科) 各四〇名、他學年若干

試験 三月二十八日

入學案内は二〇圓切手封入申込まれたし。

東京都豊島區西巢鴨四丁目(都電・バス・西巢鴨下車)

淨土トラクト

淨土編集部編

信徒必携

信徒としてぜひ之だけは知つておきたい「淨土」のみおしえ、みほとけのこと、お念佛・信徒のつとめ、其他・佛壇・香・珠數・木魚・おけき・佛式作法一通りを丁寧に説明したもの、

藤井實應著

一枚起請文(再版)

宗祖信仰の本質を、新しい思想と深い體驗によつて、かんてくだいて説かれた念佛信仰者必見の書

淨土シリーズ

文庫版四頁二圓 百以上一、八圓
送、五百以上 每八圓

大野法道著 五重の話

本宗入門の式である大切な五重とは何か、何を傳え、どんないみがあるのか。大野博士が特に平易に解説されたもの。五重宣傳のチラシ、又は、授講者施本として大へんよろこばれています。